

## フロイス 『日欧文化比較』再考

東光博英

1563年に来日したポルトガル人宣教師ルイス・フロイスは、在日22年目に『日欧文化比較』(Luís Fróis, *Tratado*, 1585)を著した。これは日本と西欧の文化風習の相違を箇条書きにし、611箇条にわたって比較を綴った興味深い作品である。自筆原稿はマドリードの王立歴史学士院図書館に長らく眠っていたが、イエズス会歴史研究所員であったヨゼフ・F・シュッテ氏が発見し、1955年、*Kulturgegensätze Europa-Japan (1585)*と題してポルトガル語原文の翻刻とドイツ語訳を刊行した。また、和訳書は1965年に岡田章雄氏により、1983年には松田毅一、E.ヨリッセン両氏によって上梓された。今から27年前の1994年、私は上記のシュッテ本を紐解いた時、翻刻の一部に不審な点があることに気づいた。それは第Ⅱ章54条で、和訳は「ヨーロッパでは、女性が葡萄酒を飲むなどは非礼なこととされる。日本では(女性の飲酒が)非常に頻繁であり、祭礼においてはたびたび酩酊するまで飲む」(松田、ヨリッセン『フロイスの日本覚書』)である。問題は日本について述べたところのポルトガル語文で、翻刻では “em Japão hé muito frequente, e em festas bebem às vezes até acavesarem.” (p.132)となっているが、文末のacavesaremは調べた限り辞書にはない。しかし、シュッテ氏はこれに全く触れず、ただ “bis es ihnen in den Kopf steigt” (酔いが頭に回るまで)と訳しているのみである。岡田訳もこれに従ったのか「酔っ払うまで」になっている。そこで私は、松田氏から自筆原稿の写真を見せていただき、それを基に検討して私なりの見解を「Gaidai Bibliotheca」第120号(1994年4月発行)に「南蛮人宣教師の見た日本」と題して発表した。その後進展もなく過ぎたが、最近、英訳本が2014年に出ていることを知ったので、これまでに出版された現代ポルトガル語版やフランス語とスペイン語の訳書など5冊で確かめたところ、翻刻がなかったり、「地面に転がる」や「酔う」など根拠のない訳に思われた。そこで今一度、写真を再検討してみた。写真はモノクロで、和紙に墨汁ペン書きされた

文書は虫食いが甚だしく文字の欠損が多い。問題の文は第253葉表の2行目にあり、文末の一語だけに虫食いが見られる。1文字目はaと明瞭に判るが、2文字目はわずかに上と下の一部を残して食われており、それに続く文字はe u e sと読める。しかし、その次の7文字目は文字の右側が無く、残った左部分の形から、aかoあるいはdであろう。ただ、前後の綴りからdではないし、他の語句のaやoの筆跡と比べればaに近い。8～9文字目は明らかにreであり、その上に省略記号が付されている。これにより問題の語を記せば、a[?]euesarēとなる。2文字目は何か。手がかりになるのは最初のaで、運筆を見ると草書体のaから筆跡が上に向かって伸びており、2文字目のわずかに残った上部の墨痕につながっている。すなわち、2文字目は背の高い小文字であり、bかd、h、l、が考えられる(kは使われない)。従って、シュッテ氏翻刻のcはあり得ない。しかし、2文字目の虫食穴の下部には、左側に点のような墨痕と右側に短い斜線が残っている。これでb、d、lは除外される。それではhかといえば、そのような綴りの語はない。全体を眺めると大文字のRのようにも見える。語中に大文字を使うのは奇妙だが、自筆文書を見ると、語頭 /r/ と語中 /rr/を大文字のRで記している。例えば第247葉表では、Remoto (= remoto)、第260葉表にはaRoz (= arroz)とある。ちなみに後者の運筆もaからRの頭頂部に筆跡がつながっている。もしこれが正しければ、問題の不明語はaReuesarēとなる。さらに、第6章31条(f.260r)に同じ動詞が使われている。最初のaが一部欠損しているものの、綴りはaReuesarであり、前者は人称不定詞、後者は非人称不定詞の違いはあるが、二つを比較すると筆跡は酷似している。aReuesarēは現代の綴字法によればarrevessaremとなり、「吐く」を意味する。第6章31条では明らかにその意味で使っている。そうであれば、第2章54条は「日本ではそれ(女性の飲酒)は非常に頻繁であり、祭礼においてはたびたび吐くまで飲む」となろう。27年前と同じ結論である。ただし、これは飽くまで個人的な見解であり、他の解釈があるかも知れない。いずれにせよ虫損劣化の甚だしい古文書の解読が厄介この上ないことだけは確かである。

とうこう ひろひで

(非常勤講師 日本・ポルトガル交渉史)